子どもネット北九州
『知りたい！！』マインドに火をつけろ！！！

相談支援専門員と放課後等デイサービスの連携って何なの？？

令和元年9月19日

（株）フィールド　相談支援センター　　リンク　春本　泰史
（株）リライブ　児童発達支援事業所　ごえん　善明　勇二

グループワーク　発表内容

- 現状の課題

① 私たちにとっての連携ってなに？

② 私たちの理想は○○

③明日からでも取り組めそうなこと

●　現状の課題

●事業所⇔相談支援員との関係が希薄

- 重要な案件でないと相談支援員へ連絡がしにくい
- 相談支援員に連絡をするとき、聞いてよい時間か躊躇してしまう
- 事業所に訪問してもらいたい。家族との話など情報をお互いが共有できていない
- 事業所によっては、突発的な訪問を嫌がる例もある
- 保護者からの相談・要望共に、相談支援員をはさまず直接学校へつなぐことが多い
- 何かあった時の協力は学校側はあるが、相談支援員とはあまりない
- 困っていることは事業所間で解決することが多く、相談支援事業所に相談することがあまり無い
- 相談支援員と直接会う機会がない
- 偏った事業所にばかり相談支援員も紹介している

●情報共有が出来ていない

- 学校との敷居が高く連携が難しい
- 情報は児童だけでなく、保護者の情報ももらいたい（保護者と中々会えないことがある）
- セルフプランでは進学先などが進めずらい。相談支援事業所を紹介してくれと言われる
- モニタリング時、相談員の電話しかないので、相談支援員のプランが現状にそぐわないことがある。
- 北九州は6月と12月にモニタリングが集中してしまう
- 事業所に相談支援員が来ない セルフプランの人は、相談員がいてもその児童に対してのトータルプランをするまでの余裕がない（相談員にもよる）
- 事業所から個別支援計画書を頂きたいが、なかなか難しい
- 利用状況報告書はほとんど出していない事業所が多い

①　私たちにとっての連携ってなに？

●他職種との連携

- 他事業所及び他職種との情報共有
- 児発管と家族との連携
- 相談支援員としての役割は連携そのもの

●情報の共有

- 保護者と子どものそれぞれの悩みや相談などを聞き取り、支援に生かす
- 変わった様子があれば随時電話連絡をしている
- 児童の受診に同行し、事業所に報告をしている
- 聞き取りしたアセスメントは事業所へと流している

●業務内容・環境調整

- 会議などを開催しての連携（事業所と相談支援事業所が相互に行う）
- システムの強化
- 信頼関係がとれているとヒヤリハットなど何かあった場合でもことが大きくならずに済む
- 風通しを良くする事
- 事業所の近くに寄った時には突然訪問をすることもある

②　私たちの理想は○○

●“つながり”

- 相談支援員と事業所お互いの状況を知ることが大切
- 相談支援員に連絡を取ったり、訪問してもらう
- お互いがもっと身近な存在となってより円滑な連携を図りたい
- 放課後デイ同士のつながりや連携があって良いのではないかと思う
- “つなぐ”役目
- 自事業所に合わない利用児の場合、他事業所に繋げる連携は大事
- 電話やメールＬＩＮＥのグループ通話などを使って支援者間で繋がる
- いつでも連携できる関係つくりをしたい

●自助・互助の関係

- 自分たちが出来るところとできないところを明確にしていく
- 病院などの医療機関との連携を行い、出来ないところを補っていく
- 相談支援員に定期的に訪問してもらい、受け入れ児童が事業所に合っているのか客観的に判断してもらいたい
- 受給者証の交付や学校での様子を確認し、定期的に報告してもらいたい
- 事業部会議を開催して、情報共有を行うと相談支援員の負担も減るのではないか

●支援方法

- 学校と放課後デイで統一した支援や関わりが出来るようにしていきたい
- 保護者の要望などを聞き取り、子どもの特質も考えてそれに合う事業所や支援方法を見つけていく
- 信頼関係を築いていく（スクールソーシャルワーカーなど）
- 保護者からの発信があると動きやすい
- 学校で先生や環境が変わる中、相談支援員が軸となって動いてほしい

③明日からでも取り組めそうなこと

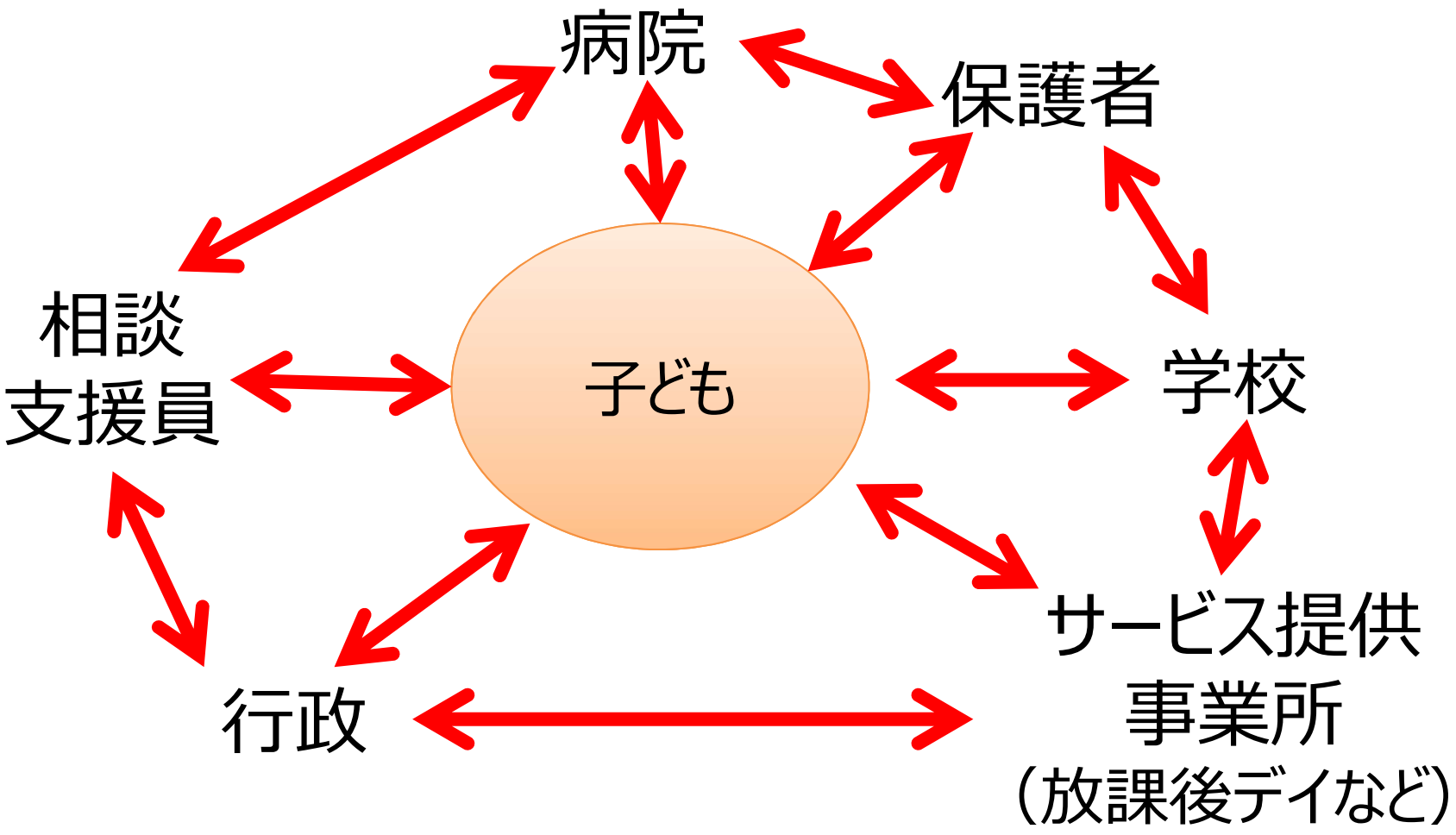
●報告・連絡・相談

- 記録を残していく
- 何かあればすぐに連絡を心掛けて実行に移す
- 他事業所や相談支援員との連絡を遠慮せずに行っていく
- お互いが計画書などを受け渡していく

●コミュニティ関係

- 相談支援員と仲良くなる
- 相談支援員とどんな理由をつけてでも来所してもらうように仕向けて来てもらう
- 合コン（飲み会）を開いて顔の知った関係を取っていく
- グループチャット

総評

- 情報交換は些細なことから始めていく事で、お互いの事業所同士の“つながり”が生まれてくる
- お互いがそれぞれの計画書を受け渡すことで情報の共有は始まっていく
- まずは顔の知れた関係つくりを行うことが大事
- 主人公はあくまで“子ども”ということを念頭において支援をしていく！

子どもを主人公とした“多”機関の連携